

「幸福の王子」オスカー・ワイルド

じゅうぶく

翻訳・結城 浩
ゆうきひろし

「あなたはどなたですか」ツバメは尋ねました。
「私は幸福の王子だ」

「それなら、どうして泣いているんですか」とツ
バメは尋ねました。「もう僕はぐしょぬですよ」

「まだ私が生きていて、人間の心を持つていたと
きのことだった」と像は答えました。「私は涙
というものがどんなものかを知らなかつた。と
いうのは私はサンスーシの宮殿に住んでいて、
そこには悲しみが入り込むことはなかつたから

だ。昼間は友人たちと庭園で遊び、夜になると大広間で先頭切つてダンスを踊つたのだ。庭園の周りにはとても高い堀がめぐらされていて、私は一度もその向こうに何があるのかを気にかけたことがなかつた。周りには、非常に美しいものしかなかつた。ていしん廷臣たちは私を幸福の王子と呼んだ。実際、幸福だったのだ、もしも快樂が幸福だというならば。私は幸福に生き、幸福に死んだ。死んでから、人々は私をこの高い場所に置いた。ここからは町のすべての醜惡なこと、すべての悲惨なことが見える。私の心臓は鉛でできているけれど、泣かずにはいられないのだ

「何だつて！」の王子は中まで金でできているんじゃないのか」とツバメは心の中で思いました。けれどツバメは礼儀正しかったので、個人的な意見は声に出しませんでした。

「ずっと向こうの」と、王子の像は低く調子のよい声で続けました。「ずっと向こうの小さな通りに貧しい家がある。窓が一つ開いていて、テープルについたご婦人が見える。顔はやせこけ、疲れている。彼女の手は荒れ、縫い針で傷ついて赤くなっている。彼女はお針子をしているのだ。その婦人はトケイソウの花をサテンのガウンに刺繡しようとしている。そのガウンは女王様の一番可愛い侍女のためのもので、次の舞踏会に着ることになっているのだ。その部屋の隅のベッドでは、幼い息子が病のために横になつて

いる。熱があつて、オレンジが食べたいと言つてゐる。母親が与えられるものは川の水だけなので、その子は泣いている。ツバメさん、ツバメさん、小さなツバメさん。私の剣のつかからルビーを取り出して、あの婦人にあげてくれないか。両足がこの台座に固定されているから、私は行けないのだ」

この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0

国際 ライセンスの下に提供されています。